

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	班青東周
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) チベット語古典文法書『シトゥ大註』の研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	根本 裕史	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	後藤 弘志	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	末永 高康	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	赤井 清晃	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	川村 悠人	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	小野田 俊蔵 (佛教大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、18世紀の東チベットで活躍した文法学者、シトゥ・パンチェンのチベット語文法理論を考察し、彼が試みるサンスクリット文法学のチベット語への適用の妥当性とその限界を探ることにより、その文法学の特色を解明するものである。</p> <p>論文は序論、本論、付論「翻訳研究」より構成される。序論ではチベット語文法学の略史を提示し、チベット語文法学の祖トンミ作とされる『三十頌』『性入法』著者問題の論点や、シトゥ学派の歴史的な位置づけを示している。</p> <p>第1章はチベット語の音声論・文字論を考察対象とする。『三十頌』の主題の一つである <i>yi ge</i> が第一義的には「音声」「音節」を意味するが、転義的に「文字」を意味すること、シトゥが「文字」としての <i>yi ge</i> をその理論の中心に置き、チベット文字理論に根拠づけられた文法学を構想していることを明らかにしている。さらに、シトゥがサンスクリット文典『ヴァルナ・スートラ』に立脚してチベット語の音声論を展開するも、チベット語に固有の結合文字の発音に関しては独自の理論を与えていること、またシトゥが7世紀のトンミの時代に守られていた「表記と発音の一致」の復活を目指していたことを明らかにする。</p> <p>第2章はシトゥの助詞理論を考察対象とし、特にサンスクリット文法学の影響を探る。『三十頌』の <i>gang la yon tan mchog mnga' ba'i    dkon cog de la phyag 'tshal lo</i> 「最高の美質を有する三宝に私は敬礼する」という詩節に現れる第二の <i>la</i> 助詞が〈目的〉(「三宝のために」) を表示するというタティの見解をシトゥは批判し、むしろ〈行為対象〉(「三宝に」) を表示するはずであると主張していること、タティが想定していたサンスクリット第四格接辞の適用における一般規則と例外規則の区別はチベット語では無効であるとし、チベット語の特性に即した理論を展開していることを明らかにしている。さらに、シトゥが〈発生源〉を表示する <i>las</i> 助詞は〈区別〉と〈境界確定〉も表示し得ることをサンスクリットの知識を用いて立証している点を明らかにする。</p> <p>第3章もシトゥの助詞理論を考察対象とし、特にチベットの他説との比較検討を行う。シトゥはサンスクリットの二重目的格の用法を踏まえて <i>mchog gsum la skyabs su shes</i> 「三宝を帰依処と知る」という表現を正しいチベット語として認め、<i>su</i> 助詞が <i>skyabs</i> 「帰依処」と <i>shes</i> 「知る行為」の</p>			

一体性を表示すると主張するが、ツェテン・シャプドゥンは実際的使用に鑑み、la助詞を省いた **mchog gsum skyabs su shes** という表現こそが正しいとみなし、サンスクリット文法理論の影響を受けたシトゥ説を批判している点を明らかにしている。さらに、トンミの理論に対する増補を行ったスムリティジュニャーナキールティによれば、na助詞とla助詞は〈質問〉や〈程度の限定〉を表示するが、シトゥによれば、それらは助詞自体が担う意味ではなく、助詞と共起する疑問詞や動詞によって表示される意味に過ぎないことを明らかにする。

結論では、シトゥの文法学がサンスクリット文法学の知識を支柱としながらもその模倣に終わらず、チベット語に固有の現象を独自の方法で分析するものであり、なおかつ7世紀のトンミの時代のチベット語への復帰を目指す点で規範文法的な性格を有することを指摘している。

本論文は、チベット語文法学に対する研究が十分に進んでいない状況の中、サンスクリット文法学との比較やチベット内部での議論の精査を通じて、シトゥの文法学の特色を俯瞰的な視点から捉えるものであり、世界的に見ても極めて独創的である。日本語表現の不備、先行研究やサンスクリット文法学に対する調査の不足など若干の問題はあるが、チベット語文法学研究の新たな模範を示すものとして高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)